第３節　中学３年生

平和と国際理解Ⅰ
～持続可能な平和と国際理解とは～

川　田　基　生・鈴　木　善　晴
長　瀬　加代子・鈴　木　克　彦
今　村　敦　司

【抄録】　中学３年生の総合人間科は、広島への研究旅行に合わせてフィールドワークをする。中学生にとっては初めてのグループ学習である。旅先でのフィールドワークも経験がない。しかし、毎年、２年間の総合人間科で培ってきた力を発揮し、仲間とともに平和と国際理解について深く考え貴重な機会となっている。また、過去を振り返り、未来に向けて自分たちは何ができうるのかをよく考える機会とするべく活動を展開した。

【キーワード】　持続可能な平和と国際理解　総合的な学習の時間　多面的理解

１．年間計画と研究テーマ、フィールドワーク先一覧

⑴授業

（前期）

回	日	授業内容（予定）	使用教室
0 1	春休み課題 ４月15日	身近な人や場所の戦争体験を知る オリエンテーション 平和についての作文	５図書館 ６各ＨＲ
2	５月13日	杉原千畝学習	第１総合
3	５月17日	春休みレポート発表準備	各ＨＲ・図書 コンピュータ
4	５月27日	春休みレポート発表会	各ＨＲ・２総 書道・社会
5	６月10日	平和のリボン作り	被服室　家庭科
6	７月１日	研究テーマ・フィールドワーク先検討	５図書館 ６各ＨＲ
7	９月９日	アポイントメント取り 事前学習	ＨＲ ＰＣ、図書館（共）
8	９月30日	訪問先決定依頼状書き	ＨＲ ＰＣ、図書館（共）

（後期）

9	10月21日	事前研究 依頼状発送最終完了	ＨＲ ＰＣ、図書館（共）
10	11月４日	事前研究発表会	各ＨＲ
11	11月11日～13日	広島研究旅行	
12	11月16日	お礼状発送完了	各ＨＲ
13	11月25日	研究集録原稿執筆	各ＨＲ
14	１月13日	研究集録執筆完了 フィールドワーク研究発表会準備	各ＨＲ
15	２月10日	フィールドワーク研究発表会	各ＨＲ
16	２月14日	まとめ　感想文　事後アンケート	各ＨＲ

⑵研究テーマフィールドワーク先

班	テーマ	ＦＷ先	見学先
Ａ１	放射線被曝による障害	放射線影響研究所	袋町小学校平和資料館
Ａ２	原爆による人体への被害	広島赤十字原爆病院	広島健康科学館
Ａ３	アメリカなど外国の原子爆弾についての考え方・とらえ方の違い	広島市留学生会館	袋町小学校平和資料館
Ａ４	国を守る側から見た平和	海上自衛隊呉地方総監部	てつのくじら館
Ａ５	日本と世界の戦争のとらえ方の違い	広島平和文化センター	国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
Ａ６	時代の変化と現代の戦争・平和	広島大学平和科学研究センター	袋町小学校平和資料館
Ｂ１	原爆症の治療法～当時と現在を比べて～	広島赤十字原爆病院	国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
Ｂ２	被爆者の精神面	広島市立大学平和研究所	袋町小学校平和資料館
Ｂ３	広島の復興・苦悩	中国新聞社	袋町小学校平和資料館
Ｂ４	目	広島平和文化センター	袋町小学校平和資料館
Ｂ５	世界から見た原爆投下	広島市立大学国際学部 井上泰浩准教授	国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
Ｂ６	世界から見た被爆都市ヒロシマ	広島大学国際センター	袋町小学校平和資料館

２．学年目標，ねらい，伸ばしたい力

①歴史的出来事について想像力を働かせ、共感的にその内容を受け止める力を養う。
（Ｂ：理解し・考え・発表する力）

②戦争中の出来事を日本からと世界からといった、多面的にとらえる力を育てる。
（Ｂ：理解し・考え・発表する力）

③これからの平和と国際理解について、どのようにあるべきかと、どう行動するべきかを考えられるようになる。
（Ｃ：人や社会のために学習内容を活用する力、Ｅ：自分の生き方について考える力）

具体的には、生徒が身近な人や自分の住んでいる地域の戦争について調べることから始め、原爆を受けた都市やそこで被爆した人の体験を聞くなど、戦争被害を受けた人の話を聞く機会を設けることと、大久野島の毒ガス工場跡やその実態の話を聞く機会を設けること、また戦時中に日本本国の命令を無視して自分の信念を貫いた人がいることという、日本の中でも戦争に対する様々な立場があったことを知った上で、平和と国際理解について、自分が今後平和を維持するためにどのように関わっていくかを考えられるように活動を計画した。

３．学習方法

個人およびグループによる研究

最初は個人で平和と国際理解に関する調べ学習を行い、問題意識を深めた上で、広島に関するテーマを設定し、似たテーマを設定したものでグループを作り、研究を進めるといった形で学習した。

４．実践内容　上の表の通り

５．評価基準と方法

⑴方法
・生徒による自己評価（アンケート、発表や一年間の振り返り）
・教員による評価

⑵基準
ア　レポートやインタビューを通して戦争被害者の気持ちを自分の言葉で表現することができる。
イ　平和と国際理解についての自分の考えを様々な面からとらえて表現できる。
ウ　調べたことを基に持続可能な平和のために自分ができることを表現できる。

⑶評価資料
・生徒の自己評価プリント
・生徒の総合人間科への取り組みの様子

⑷評価資料の集計と分析（総数80名）

１）平和と国際理解について

身近な人や広島での証言者の方の話を聴いて、戦争被害者の方の気持ちを自分なりにしっかりと受け止めることができた。

1	あてはまる	45名	56.3％
2	ややあてはまる	30名	37.5％
3	どちらともいえない	４名	５％
4	あまりあてはまらない	１名	1.3％

5　あてはまらない　　0名

「あてはまる」という積極的な解答が半数を超えていて、「ややあてはまる」と合わせると93.8％と圧倒的な数字である。自分たちは証言者の方の話を直に聞くことのできる最後の世代であるという自覚と、話のリアルさがこの数字に表れていると考えられる。生徒たちは「具体的な話を聞いて怖くなった」とか、「人間は忘れたことを繰り返す」「今は昔と比べて幸せすぎる。感謝すべきだと思った」といった言葉からも窺い知れる。

2）「平和と国際理解」について自分なりの意見に変化があった。

1	あてはまる	28名	35％
2	ややあてはまる	30名	37.5％
3	どちらともいえない	13名	16.3％
4	あまりあてはまらない	6名	7.5％
5	あてはまらない	3名	3.8％

この設問では「あてはまる」と「やや当てはまる」を合わせて72.5％と圧倒的なのだが、他の質問に比べて「あてはまらない」「ややあてはまらない」を合わせた回答をした生徒が11.3％程いる。「よくわからないことだから考えなかったが、よくわからないことだから、深く考えようとしている」といったレベルから、「戦争をしないことが平和だと思っていたが、他国を理解し、罪を認め、相手の罪を許すことが平和なのだ」といったよく考えられているものまで様々であったが、「このテーマをグループで学習するのは、対話から始まるテーマだからだ」といった理解をしてくれている生徒もいた。11.3％の生徒は、「信念は変わらないが、その信念の理論的かつ体系的な説明ができるようになった」というように、元々からしっかりした考え方を身につけている生徒が含まれていることもわかった。

3）身近な戦争について調べたり、戦時中にも人道的に自分の信念を貫いた人のことを調べたり、実際に被爆をしても平和活動をしている人の話を聴いたり、日本が戦争で毒ガスを作り、使用した事実を学んだりして、平和と国際理解をすることには様々な側面があったことを理解できた。

1	あてはまる	42名	52.5％
2	ややあてはまる	28名	35％
3	どちらともいえない	6名	7.5％
4	あまりあてはまらない	1名	1.3％
5	あてはまらない	3名	3.8％

現状の多面的理解を尋ねる質問である。「あてはまる」単独でも半数を超えている。「ややあてはまる」数に入れると87.5％と圧倒的である。研究旅行のコースが広島と大久野島のセットであることからも、こちらの狙いをしっかりと生徒たちが受け止めてくれているようである。記述内容では、「平和というものにもとらえ方がたくさんあることを知った」とか、「今の日本は核の抑止力で平和と保っていることがわかった」とか、「様々なことを掘り下げると歴史的な要因があることを知った」「日本とアメリカでは核爆弾に対する認識が違うことを知った」という内容があった。

4）持続可能な平和と国際理解を可能にするには、どのようなことが必要なのか、自分なりの考えを持つことができた。

1	あてはまる	43名	53.8％
2	ややあてはまる	29名	36.3％
3	どちらともいえない	6名	7.5％
4	あまりあてはまらない	1名	1.3％
5	あてはまらない	1名	1.3％

「あてはまる」と「ややあてはまる」を合わせて90％を超える生徒が何をするべきかを考えることができた。ただし、その記述内容を見ると、「やはり今は核抑止力がいる」、「争いを0にすることは無理。減らすことを考えるべきである」、「平和は難しいが、国際理解から始める」、「相手を信頼する心が必要」といった、現状を根本から変えることは難しいと考える生徒も少なからずいるように感じられる。

5）持続可能な平和と国際理解を可能にするために、自分はどのようなことをする必要があるのか、自分なりの考えを持つことができた。

1	あてはまる	37名	46.3％
2	ややあてはまる	31名	38.8％
3	どちらともいえない	7名	8.8％
4	あまりあてはまらない	4名	5％
5	あてはまらない	1名	1.3％

自分でできることは限られていることはよく認識している。その上で自分のできる範囲は「次の世代に伝える」ことのようらしい。「後世までこの事実を伝えるだけ」とか、「国際理解と平和のためにも英語を学ばなくてはいけないと感じた」という、積極的に自分のできることをよく考えた記述が見られた。ただし、一部の生徒には、「正直難しくてよくわからない」といったものから、「今のままでは戦争は起きない」といった安易な考

えをしている生徒も見受けられた。

６．成果と課題

「平和と国際理解」という大きなテーマについて、生徒達は最初「平和」というものを「戦争が行われていない状態」という狭義な定義で考えていたようである。しかし、研究を進めていくに従ってそのような狭い意味での平和で物事を考えるのではなく、「不幸な境遇にある人がいない状態」という広い意味での平和について考えるようになった。また、平和を保つためには「国際理解が不可欠である」ということも考えられるようになってきた。テーマに二つのことが含まれており、密接な関係があることは理解したものの、副題である～持続可能な平和と国際理解とは～という部分については自分にできることとして生徒が一様にあげていたのは「まずは自分が見聞きしたことを忘れずに次の世代に伝えていくことだ」という意見が並んだ。自分でできる範囲で、中学生に簡単にできることは限られているものの、もう少し積極的に平和に関わるためにできることを考えられるようなるために、この授業で何ができるかという課題が残った。

（文責：今村敦司）